

第 148 回 中央教育審議会大学分科会（令和元年 6 月 13 日）
主な御意見【未定稿】

【第 6 期科学技術基本計画に盛り込まれるべき事項について】

（総論）

- 科学技術基本計画において、国の研究所と大学を同じ土俵で論じてはいけないのではないか。大学は自由な発想で学術研究を担う、そこから新しい知が創造される場である。まずは大学の役割、立ち位置を明確にしておくことが必要である。
- あるべき国会像、社会像を明示し、バックキャストすることはその通りであり、この「あるべき」が何なのか重要になってくる。現在からは思いもよらない社会があるかもしれない。統一的な考え方を示すのは難しいが、多くの関係者による議論が行われ、「あるべき姿」が描かれることを期待したい。
- 社会全体で大学院教育をどう考えるのかということについて、広い視野で論じられる時期になったことは喜ばしいことである。

（教育と研究を両輪とする大学の役割について）

- 企業も社会も「教育の質」を問うてこなかった事実はその通りであるが、問う機会もなかった点は反省すべきである。大学教育が良い方向に向かっているのか社会と対話する機会も大切だと考えている。
- 就職活動の経験から、企業の求める博士人材は幅広い知識を基盤とした高い専門性を有する「T型人材」とであると実感している。今後、全ての博士課程においてT型人材を育成し、さらに付加価値を提供することが望ましい。
- 博士課程教育リーディングプログラムは一定の成果を挙げているが、その好事例が大学院教育全体には広がっていない。好事例の普及、他大学・専攻等への展開について議論すべきではないか。
- 博士論文研究基礎力審査の導入は正しかったのか、専攻が細分化されすぎていて新しい融合領域への対応をどうするかなど、現在何が上手くいっていて、何が上手くいっていないのか、具体的な検証が必要ではないか。
- 博士課程進学において、経済的支援が確保されている点は大きなインセンティブになり、同級生も経済的支援があったから博士課程へ進んだという声

が多いので、大学院生に対する経済的支援の充実をお願いしたい。

- 大学院進学 of 阻害要因として、就職活動の時期・期間、経済的支援があるのではないか。博士学位取得者からも経済的支援の重要性が示されており、博士課程学生の2割以上という記述に根拠があるのか疑問である。数値も大切だが、総合的に経済的支援を充実していくことが必要ではないか。
- 大学教員の研究専念時間確保と表裏一体なこととして、大学院生の主体的な教育研究時間を確保すべきであり、大学院生が研究室の研究を支える歯車として使われていることは問題である。ポスドクや研究支援補助者を配置することで、大学院生が十分な研究能力を身に付ける教育を提供することに繋がる。

(博士人材が活躍する社会の実現)

- 外資系企業では多くの博士人材が活躍している。そこで活躍している博士人材は一つの専門性だけでなく、幅広い知識・技能を身に付けている。企業側もこのような人材の処遇をよくしていく努力も必要であるが、グランドデザイン答申が見据えている2040年には、博士学位取得者が社会のあらゆる分野で活躍することがスタンダードになっていることを確信している。
- 博士人材が社会のあらゆる分野で活躍することはグローバルスタンダードであることを確実に伝えていただきたい。

(その他)

- 産学連携に関して、アカデミアの世界(大学教員)は自分の専門分野に閉じた議論、視点にとどまっているのではないかと危惧する。企業目線で、大学に眠っている価値を創造するため、多様性は重要であり、ハードルの低い共同研究という観点も大切ではないか。

【教育と研究を両輪とする高等教育の在り方に関する検討について】

（教員、教育の在り方）

- 研究として博士学位論文をまとめる苦労はあるが、幅広い教育プログラムで学ぶことにより、自分の研究分野以外の専門知識を備えることできたという側面もある。
- 教育と研究の両輪という観点は重要である。特に「研究に基づく教育」が大学教育の原点であり、そのためにも教員力が最終的に非常に重要である。プレFDの説明もあったが、大学教員の教育力を高めるために国も積極的に支援すべきではないか。
- 学部1～3年生までの教育が非常に大切であるが、授業がつまらないという学生の声も聞こえてくる。教育カリキュラム、一つ一つの授業科目のクオリティが重要であり、例えば、一つの授業科目を複数教員が担当し、年度交代で担当し、相互チェックを通してブラッシュアップを図るということも考えていかなければならない。
- 地方創生、リカレント教育という観点から、首都圏の社会人が地域の企業でインターンシップを行うなど、地域の大学が教育プログラムを構築し、人材育成に寄与している好事例がある。このような地方創生に資する取り組みを広げていただきたい。

（文系、理系の在り方）

- 大学段階はもとより、高校段階から文系、理系に分かれて学ぶことが本当に良いことなのか。大学入試の問題もあるが、初等中等教育段階から一緒に議論する場は大切だと考えている。
- 文系、理系に分かれないというメッセージは非常に大切であるが、新たな入試改革が進む中で文理融合は簡単なことではない。女子学生を含め幅広い理系人材が増えてほしいし、文系を選ぶと将来ビジョンが見えにくいという課題も見えてくる中で、どのように文系、理系を捉えていくのかを意識していかなければならない。
- 企業の観点から、採用時において、文系とか理系とかで区別することはなくなっている。文理融合は賛成だが、いくら知識が豊富であっても人間力がなければ意味がない。社会、企業、大学において「人間力」を備える必要性に

ついて触れていくことも必要ではないか。